

フィールド⇄ワーク展
日々のアトリエに生きている

資料編

齋藤陽道

1983年東京都生まれ。写真家。都立石神井ろう学校卒業。2010年、第33回キャノン写真新世紀優秀賞受賞。2014年、日本写真協会新人賞。2019年、写真集『感動、』を刊行。

齋藤陽道は、なにげない日常、多様な人々の佇まいや心の機微を、穏やかな光とともに、繊細に、かつまっすくにとらえてきた写真家である。今回、本展のために、昨年から今年にかけて、岡田美佳、澤田隆司、清水政直、似里力、蛇目の5名の作家たちの日常空間に赴き、かれらの生活や創作の現場〈フィールド〉を巡り、撮影を行った。

（さいとうはるみち）



齋藤陽道「あふり」2019年、写真集『感動、』より

岡田美佳

（おかだみか）

1969年東京都生まれ。刺繍画家。ポコラート全国公募展2011オーディエンス賞受賞

糸、布、ビーズを用いた刺繍の画面に、アクリル絵具やマニキュアなど着彩が加わり、独自の「絵」を創り出す。岡田美佳は、ことばのコミュニケーションが困難ななか、幼少時よりものづくりを好み、中学生の頃から染色や刺繍に親しんだ。母親の回顧によると、20代初めの頃に好んで眺めている画集があったので「模写してみたら」と勧めたという。すると、刺繍による画集の模写作品がすぐに仕上がり、このことをきっかけに、今にいたる刺繍画制作が始まった。これまでに岡田が繰り返し選んできたモチーフは、手の込んだ料理やスイーツのならば食卓、映画の一場面のような窓のある風景など、静かな生活の情景である。1990年代以降、個展を多数開催し、雑誌『暮しの手帖』（1997年10、11月号）に紹介されるなど、反響を呼んだ。各地での展覧会には多くのファンが訪れているという。刺繍のための材料の支援からマネジメントまで、岡田を支えようという人が自然と現れたことは、岡田の制作活動の背景を特長づける一面である。

現在、作品管理や展覧会開催が10数名のボランティアで進められている。

インタビュー：岡田美佳後援会（代表　村田真佐子）、岡田武

澤田隆司

1946年兵庫県生まれ、2013年没。2011年「共生の芸術祭」出展

澤田隆司は、神戸市長田区にある福祉事業所・片山工房で、2003年から10年間協働で描いた。かつて、1960～70年代を中心に全国でおこった障害者自立運動のうねりのなか、地元の阪神地域で代表的な働きを担った一面をもつ澤田は、片山工房の前身となる事業所にて、現在の片山工房理事長・新川修平と出会う。ある時、「自分で字を書きたい」という声事業所内であがった。新川は、澤田が自分でコントロールできる身体のわずかな動きを使って何ができるか、あらためてそこで考えたという。そうして、試しに絵具を入れた紙コップを用意し、澤田に足で倒してもらった。

澤田が右足首のスナップを使い、紙コップを小さく蹴ると、キャンパスの上に赤いペンキが流れ出て、きらめいた。その一瞬の体験は鮮明に新川の心に残っている。そこから、澤田隆司と新川修平との協働の絵画制作が始まった。澤田が色を選び、絵具の入った容器を蹴る。続いて、絵具の流れ出る向きや角度、加減について、澤田は声と身振りで示す。新川はそれらをキャッチし、支持体を動かして応じた。澤田が残した数々の画面には、張り詰めた、凝縮された制作の時間が記憶されている。

インタビュー：新川修平（片山工房理事長）



澤田隆司「あふり」2019年、写真集『感動、』より

清水政直は、小学校低学年の時に失明した。青年期には、点字図書を通じて文学作品や哲学書に親しんだ。キルケゴール著『死に至る病』は、点字がぼろぼろになるまで、繰り返し読んだ一冊だ。社会人になり、家業のほか、カセットテープ録音によって視覚障害のある人へ情報伝達を行う事業をおこし、従事してきた。能動的な性格の持ち主であり、これまでに、フルマラソンへの挑戦から、演劇や音楽鑑賞、詩や川柳まで、幅広い趣味を開拓し、仲間をつくり、日々の生活の中で表現や創造を楽しんできた。60代になって、視覚障害のある人を対象とする「土粘土による造形表現のワークショップ」に参加、美術家・西村陽平と出会ったことで、さらに清水の自由な表現領域が広がった。即興的に創り出す造形物に向けて、同じく即興的に詩を詠み、愛しむのが清水のやり方である。

清水政直は、2019年「トットARTS フェス2019+ わ!しながわ」展出展

インタビュー：清水政直

^[1] *各作家のField notesは、当ギャラリーのスタッフが作家本人や関係者に行ったインタビューを再構成したものです。

似里力 (にさとちから)

1968年岩手県生まれ。
2009年、岩手県芸術祭現代美術
部門優秀賞受賞

Field notes

似里力は、岩手県花巻市にある施設、るんぴにい美術館に併設される「アトリエまゆ〜ら」で、似里が呼ぶ「糸っこ」を作っている。「アトリエまゆ〜ら」では、かつて、織りと刺し子のグループ活動が行われていた。似里はそこでの古くからの参加者として、これまで20年近く、糸や布とじっくり付き合っている。似里のつくる「糸っこ」は、糸を細かく切って、結び、玉状に巻いていくユニークな手仕事である。もともとは、内職として行っていた糸巻き作業の途中で糸が絡んでしまったことがあり、その絡んだ糸を切り、ほどこき、結びなおしたことがきっかけとなったものづくりである。現在は、従来の糸巻きから転じ、糸を切ることから似里のこの造形が立ち上がる。るんぴにい美術館アートディレクターの板垣崇志によると、似里は3、4月かけて一つできあがる糸っこを人にあげることもあるという。しかしながら、この糸っこづくりは、似里による自分自身のための営みなのであろうと、板垣は考えている。

インタビュー：板垣崇志(るんぴにい美術館アートディレクター)

蛇目 (へびめ)

1982年兵庫県生まれ。画家。
2018年「日本のアール・ブリュット
もうひとつの眼差し」展(アール・ブ
リュット・コレクション、スイス、ロー
ザンヌ)出展

Field notes

中学生の頃、自分が描いた絵をおもしろがってくれる美術教員との出会いがあり、その教員を通じシュルレアリスム絵画に関心をもった。学校生活が肌にあわず高校を中退し、17歳から20歳の頃までは、小説、マンガ、映画、落語からクラシック音楽まで、ひたすら浸り、インプットする時間を過ごした。ある時、ふと自分も表現したいと思いつき、水彩画の道具を揃えたことを覚えているという。

20代の初めに、近くの美術館で開催されたゴッホ展に行き、その色彩に感銘を受けた。その後、水性ペンを使ったドローイングの制作を重ね、20代の終わり頃から、アクリル絵具を何層にも塗り固めて彫刻刀で削り出す、現在の技法による制作を始めた。蛇目にとって、作品制作における「作業性」は、自身の支えとなっているという。一度削り方のパターンを決めると、毎日決まって4回絵具を塗り重ねる。塗り作業を1カ月間繰り返したのち、削り出し、作品ができあがる。

インタビュー：蛇目